

I o T新時代の未来づくり検討委員会 人づくりWG 高齢者SWG（第2回）

○日時：平成29年12月21日（木）10:00～12:00

○プレゼンター

- ・ソフトバンク株式会社 伊藤様
- ・一般財団法人ニューメディア協会 松下様
- ・近藤構成員
- ・板生構成員

○主な議論

- ・スマートフォンは、購入してから使い方がわからないと後悔する人が多い。具体的なアプリや使い方を示して支援することが有効。また、100%理解してから使い始めるものと考えてのではなく、本人と教える側の双方が、何をやりたいのか理解して、そこから使い始めることが重要。
- ・NPOとキャリアのスマホ教室では、集まる人が違うのではないかと考える。中長期的に、地理的に近い場所（自宅の徒歩圏内）で、自分が聞いてみようと思える人がいる場があることが必要である。
- ・代理店に任せず、キャリアとしてスマホ教室を直接運営。安いものではないスマホをめいっぱい使ってもらいたいという思いがある。
- ・シニア情報生活アドバイザーはもともと男性が多数だが、スマホについては女性のアドバイザーが多い。他方で、仕事でパソコンを使ってきた方はスマホ・タブレットを教えるアドバイザーになることにそれほど問題はないようだ。
- ・パソコンだけあればいい、という高齢者にスマホを学ばせる大義名分が必要。
- ・シニア情報生活アドバイザーの講座回数を分析すると、会議室の確保や広報活動等の連携が可能であるとの理由から、自治体との関係が強い団体の回数が多い。今後、パソコンだけではなく、スマホやタブレットに軸足をおいてアドバイザーを増やすことが必要。
- ・キャリアのスマホ教室について、①従業員教育：メーカー等の協力を得て、拠点で教育、②従業員のバックグラウンド：元携帯ショップ販売員（地元の主婦も多い）、量販店店員、社内公募等、③教室受講者：シニアのほか、親にスマホを教えようとする30代～40代、④今後の方針：携帯電話の使い方だけでなくECなども教えることになるだろう、という状況。
- ・シニア情報生活アドバイザーについて、①アドバイザーの属性：50代以上の主にパソコンユーザーで、地域貢献等の思いを持つ人、②地域の偏り：都市部が6割、地域が4割で、地理的には全てカバーしきれていない、③連携団体：100程度、という状況。
- ・スマホ教室等の各種講座の情報は、たとえば市町村が地域ごとに収集、提供し、横の連携を図る等の工夫が必要である。